広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第２号　2021　474－483

トムヤンティ『メナムの残照』におけるジャポニズム

―「先進国男性―オリエント女性」の構図をめぐって―

ブンサーム・スィラダー

（2021年10月５日受理）

Japonism in Thommayanti's *Sunset at Chaophraya*:
Focusing on the Composition of 'Man from Developed Country—Woman from the Orient'

Sirada Boonserm

Abstract: *Sunset at Chaophraya* (*Khu Kam*) is a well-known novel about Japan written in Thai by the Thai author Thommayanti in 1965-1969. Set in Bangkok during World War II, the novel tells the tragic love story of Kobori, a Japanese soldier, and Angsumarin, a Thai woman. In this study, I analyze elements of Japonism in *Sunset at Chaophraya* by focusing on the composition of the 'man from developed country—woman from the Orient' dynamic to explore Thailand's national image via the mirror theory. Four elements of Japonism are discussed: 1) The concept of the man from developed country improving the woman from the Orient. 2) The image of Japan, Musume, and Samurai, particularly the change in the Samurai's image from savage to protector. 3) The motif of the intelligent Oriental woman trusted by the man from developed country. 4) The aspects of Kobori and Angsumarin's location emphasize the Orient's timelessness and exoticism, and that the man from developed country is assimilated into the life of the woman from the Orient. These elements, the dilution of Kobori's 'Japaneseness', and Angsumarin's pride as a Thai national, construct Japan and Thailand's equal position, which indicates Thommayanti's perception of the Thai nation.

Key words: Thommayanti, Japanism, Japanese Representation, Thai Literature
キーワード：トムヤンティ，ジャポニズム，日本表象，タイ文学

１．はじめに

『メナムの残照』（タイ語名：คู่กรรม）は日本を題材にしたタイ文学の代表作の一つである。第二次世界大戦下のバンコクにおける日本将校小堀大尉とタイ人女性アンスマリン（以下，小堀とアンとする）の悲劇的な物語である。この作品は，1965年から1969年に女性作家トムヤンティ（本名：ウィモン・シリバイブーン，1936-2021）により執筆された。[1] その後，1970年から2013年にわたり，複数回の映画化，ドラマ化，演劇など様々な形態で再生産されてきた。特に，1990年版は社会現象となり，当時のタイ人の日本イメージ形成に強力なインパクトを与えた。主人公小堀が日本男性の代名詞になった現象や，第二次世界大戦時に日本軍が埋めた埋蔵金を「小堀の財宝」と呼ぶこと，現在でも多数の日本関係の店が「コボリ」と名付けられていることから，『メナムの残照』が作品発表後のタイ社会へ影響を与えたと言えるだろう。[2] 小堀は，タイ社会において日本男性の象徴とされ，ある時期最も知

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：永田良太（主任指導教員），柳澤浩哉，山元隆春，溝渕園子

られている日本人であった。小堀が抱える日本人イメージは，タイの日本言説の一つになり，日本人像の構築に影響を及ぼしている。『メナムの残照』には日本に関する強力な参照能力が内在するため，作中の日本表象及び日本人像を取り上げて，タイ国内や日本でも少数ながら研究されてきた。従来の研究では主に『メナムの残照』が表象する日本や日本人に注目しているが，作中の日本表象はどのような役割を果すのかまだ不明確である。

異文化の視点から文学作品における他者表象を考察する際には，E.W. サイードの『オリエンタリズム』が多用されてきた。『オリエンタリズム』は東洋（オリエント）に対する西洋の眼差しについて論じている。サイードは『オリエンタリズム』で，西洋と東洋を二項対立として見なし，西洋は東洋という他者を使って，自己像を構築したと指摘している。つまり，『オリエンタリズム』では，東洋は鏡としての役割を果たす。この論に基づいて，『メナムの残照』における日本表象も同様な機能を果たすと仮説を立てた。

西洋オリエンタリズムにおいて日本はオリエントの一部とされる。しかし，明治時代の文明開化後，日本のアジアに向けた視線にオリエンタリズムの要素が窺える。日本はオリエンタリズムの主体となり，アジアは客体化された。権力によって支配した植民地，また，それに値する地域を美しく表現すると共に，異文化に対する偏見や差別も内在する。オリエンタリズムは，「支配者—被支配者」という政治的な視点が強い。しかし，日本とタイの関係は，直接的支配ではないためタイ文学の日本表象を，「支配者—被支配者」の視点で論じることはできない。

外から見た日本論には，「ジャポニズム」がある。ジャポニズムは，19世紀の半ばから20世紀初期にかけての，フランスを中心にした日本趣味を示す。ここで注目したいのは，タイ文学の日本表象には，西洋のジャポニズムの影響を受けた一面があるということである。タイ文学において，「日本人」が認識されはじめたのは，1907年出版のラーマ五世のヨーロッパ訪問記『クライ・バーン』からである。それは，オペラ『蝶々夫人』の鑑賞を通したものであった。その後，タイでは『蝶々夫人』の影響を受けた作品が次々と発表された。タイ文学における日本受容は西洋経由であったため，ジャポニズムがタイ人の日本に対するイメージ構築に影響を及ぼしている。(3) 作者トムヤンティがどの程度意識しているかは不明だが，『メナムの残照』でジャポニズムの要素を筆者は察知した。明白な要素として，作中にジャポニズムの代表作『蝶々夫人』の名言‘It is better to die than live in shame.’に類似する文章が三回登場している。これに着目し，『メナムの残照』におけるジャポニズム要素に焦点を当てた。

ところが，『蝶々夫人』に見られる日本表象は，西洋人男性作者の眼差しに映ったものである。既に述べたようにジャポニズム作品では，東洋の一部である日本を他者と見なしており，日本に対する偏見も窺われる。日本を見るタイの視線が西洋至上主義の影響を受けたことを踏まえると，複雑なことになる。なぜなら，タイは日本の国際的な地位の高さも認めているからである。オリエンタリズムのように政治から成り立った「上下関係」ではないが，日本がより発展していることから，タイは日本を上の立場に置く意識を持つ。このような葛藤の中で，タイ人作者であるトムヤンティはどのように日本を表象したのだろうか。

ジャポニズム作品の一般的な構図は，「西洋男性—日本女性」である。これを日本的オリエンタリズム論やタイから見た日本の国際的な地位に基づいて考えると，小堀とアンは，「先進国男性—オリエント女性」となり，ジャポニズムの構図に類似する。上述したように元来ジャポニズムの多くの作品は，西洋男性の視線で表現された。それに対して，同じ構図を採用した『メナムの残照』は，オリエント女性の視点を採っている。この視点により，日本人に結び付く事物の意味付けが異なると言えよう。『メナムの残照』では，桜に言及された。ジャポニズム作品では桜が日本女性に結び付き，弱々しいイメージが描かれる。一方で，『メナムの残照』は桜を日本・日本人男性に結び付き，やさしく穏やかなイメージを作り出す。トムヤンティは軍人の強さを持つタイ人男性の類型にこうしたイメージを加え，小堀という日本人男性を描き，「残虐ではない日本軍」のイメージを生み出し，日本の良い印象を描いている。(4)

西洋オリエンタリズム論で，東洋は鏡としての役割となり，西洋はその鏡に優越した存在として映し出されている。『メナムの残照』における日本表象も仮に鏡としての他者の役割を果たせば，トムヤンティはこの構図を使ってどのような自己像を構築しているのかが問題となる。

本論文は，鏡としての他者を作品に取り入れることを通して，どのような自己像を制作するのか明らかにする試みとして，『メナムの残照』におけるジャポニズム要素について論じるものである。『メナムの残照』が執筆された時期は，タイ社会で外国の影響が強い時期だった。日本も当時タイへの経済的進出をした。1964年のタイ大丸デパートの開業により，バンコク滞在のタイ人は，日本軍兵士以外の日本人，日本文化に接触する機会が増えたと推測される。本論文はこの時

代情勢を視野に入れて，「先進国男性―オリエント女性」の構図を考察し，最後にトムヤンティの国家に対する意識を検討する。

2．ジャポニズムが表象する日本

ジャポニズムはフランス語の‘Japonisme（ジャポニスム）’に由来する。この言葉が初めて登場するのは，1872年から1873年にかけての，フランスの『文芸芸術復興（La Renaissance littéraire et artistique）』である。この雑誌に，批評家フィリップ・ビュルティ（1830～90年）が書いた日本の歴史，文化，芸術に関する論文‘Le Japonisme’が連載された。(5) 当時，日本が輸出した浮世絵や工芸品は，フランスの美術の世界に大きな刺激を与えた。最初は日本のモチーフを取り入れた「ジャポネズリー」から始まったのだが，ジャポニスムは，単なる異国趣味の一種に留まらず，「日本の芸術からの影響」という意味に拡大した。現在は美術の分野のみならず，文学，演劇，音楽などにも広範囲で使用されている。

ジャポニズムとオリエンタリズムは西洋から見た東洋という点で共通している。これについて，馬渕（2017）は，オリエンタリズムは直接的支配を通じて形成されたイメージであるのに対して，ジャポニズムは日本美術品に対する趣味から生まれたため，ジャポニズムはオリエンタリズムより政治的な視点が緩和されたと述べられている。(6) しかし，ここで忘れてはならないのは，オリエンタリズムはジャポニズムの背景を支えているということである。つまり，オリエンタリズムもジャポニズムも同様に西洋至上主義の位置を取る。そのため，ジャポニズムは東洋の一部である日本を他者として見なし，日本に対する偏見も見られる。これを踏まえると，ジャポニズムにおける日本表象を検討する前に，まず，オリエンタリズムにおける東洋のステレオタイプを起点に検討していこう。

サイードのオリエンタリズムは，西洋と東洋を二項対立の存在と見なしている。サイードは「一方に西洋人があり，他方にアラブ＝東洋人（オリエンタル）がいる。前者は，（順序不同ということで挙げると）合理的，平和的，自由主義的，論理的で，真の価値を見分ける能力をもち，生来の猜疑心はもたないのに対して，後者にはこれらのことが全部欠けている。」と指摘した。(7) 西洋のイメージは，文明の人間で，知性的な存在であるのに対して，東洋はその反対の存在とされている。また，東洋のステレオタイプとしては，古代性，官能性，残虐性，奇異性が挙げられる。(8) 東洋を女性の象徴，西洋を男性の象徴とし，東洋の非力を強め，「支配されるべき東洋」のイメージを作り出した。

ジャポニズムにはこのようなステレオタイプも同様に見られる。19世紀半ばから20世紀初期のジャポニズム作品における日本表象の柱は，風光明媚な日本，日本女性「ムスメ」，日本男性「サムライ」の三つに分かれる。風光明媚な日本は，一種の古代性と見なせる。ジャポニズムが盛んになったのは，西洋の産業革命後であった。そのため，西洋社会にとって日本の自然はノスタルジアな空間を描き出しているのである。

ジャポニズムの作品，とりわけ演劇の世界では，日本女性（ムスメ，ゲイシャ）は主役で，日本男性（サムライ）は添え物とされた。(9) 日本女性は「ひ弱な花」「美しい」「やさしい」「従順的」「受け身」「子供っぽさがある」「忍耐力が強い」など表象された。オペラ『蝶々夫人』では，このようなイメージに切腹を加えて，同情を寄せる存在を強めている。それに対して，日本男性は「高貴な野蛮人」「醜い」「卑しい」「滑稽」「剛毅」「気高い」と表象された。(10) これは「日本が支配されるべき」と直接的に表現しないのだが，「日本男性は日本女性に相応しくないため，西洋男性は日本女性に手を出す権利がある」と間接的に描いている。

このような表象になった要因の一つは，日本が男性の視線から表現されたからである。日本の話を伝えるのは男性作家であるため，ムスメは西洋男性の地上の楽園の存在とされた。(11) 日本女性のイメージは美しく表象されているのだが，その目的は西洋男性の幻想を満たすためだと指摘されている。そのため，日本女性は理想的で，家父長制社会での女というイメージにされた。「西洋男性―日本女性」の構図では，西洋男性は権力を持ち，日本女性を改良する。具体例として，オペラ『蝶々夫人』が挙げられる。ピンカートンに合わせるため，主人公の蝶々さんは，英語を習い，宗教までも変えた。ピンカートンは蝶々さんを改良する役割を果たす。(12) オペラ『蝶々夫人』は鏡としての日本を利用して，西洋の優越感を描き出している。

トムヤンティは『メナムの残照』を執筆するとき，日本訪問の経験がなく，当時の日本に関する書籍を頼りに，日本・日本人のイメージを制作した。タイ文学やタイにおける日本文化受容は，西洋経由の一面があることを踏まえると，ジャポニズムが表象する日本は，トムヤンティに何等かの影響を及ぼしていると考えられる。「西洋男性」の目に映る日本表象は，「オリエント女性」に移植されるとどのように表現されるのか，この位置選定を視野に入れて『メナムの残照』における日本表象の考察はほとんど進んでいない。

3．『メナムの残照』における日本表象に関する研究

トムヤンティは王党派の作家である。Makhin（2015）はトムヤンティの５篇の作品を考察し，トムヤンティの作品，特に時代小説における王党派のイデオロギーを明確にした。[13] トムヤンティの作品はメロドラマ的大衆文学で，複数回，様々な形態で再生産された。文学界は元より，トムヤンティの作品はタイ社会において，王党派の言説の巨大な参照項を増やしている。

トムヤンティの作品には国家に対する意識が内在しているが，『メナムの残照』を取り上げて，この点を検討する従来の研究は僅かである。小堀とアンの関係における国家観に言及したのは，平松（2020）である。[14] 平松（2020）は小堀とアンの出会った場面と別れた場面の二人の視線に着目した。出会った場面で，小堀はアンを見下ろすが，別れた場面は逆であり，日本とタイの関係の比喩であると指摘している。

一方，Prasarnnam（2016）は『メナムの残照』を戦争小説とみなし，原作における「戦争の価値」「価値の戦争」をテーマにして分析を行った。[15] Prasarnnam（2016）で，『メナムの残照』が「国家」に言及しているのは，当時の時代情勢から影響を受けたからであると述べられている。『メナムの残照』が執筆された当時は，アメリカによるタイ支援など，東西冷戦期のタイ社会において外国の影響が一層増した時期であった。また，タイ国王王妃陛下の日本国訪問，日本皇太子明仁陛下と美智子妃殿下のタイ国訪問が挙げられ，日タイ友好とタイ社会において日本が注目されたことが指摘されている。そのため，当時「国家」をテーマにした小説は少なくない。『メナムの残照』における「国家」も，偶然ではないと示されている。Prasarnnam（2016）では，外国の影響のため，当時の小説は，「国家」を話題にするという点まで言及しているのだが，どのような自己像を構築しているのか触れていない。

『メナムの残照』における自己像について検討したのは，トリラッサクルチャイ（2013）である。[16] ここでは，日本文学におけるタイ表象について研究しているが，その一部は，第二次世界大戦の日タイ表象の分析である。トリラッサクルチャイ（2013）は，アンを理想的なタイ人女性として描写しており，小柄，白い肌などを持ち，インテリ女性で，日本が見た南洋女性のステレオタイプから逸脱していると述べた。また，「タイは（中略）〈平和〉〈調和〉を愛し，困っている者を助けるのは，トムヤンティが伝えたい自画像である」と指摘している。しかし，これらの自画像はどのような役割を果たしているのかまでは触れていない。

一方，『メナムの残照』における日本表象を考察した先行研究には，Sirasart（2010），Netisingha（2011），平松（2013）がある。Sirasart（2010）は歴史の資料を照らし合わせて，『メナムの残照』における日本らしさを検討し，トムヤンティは誤った日本軍のイメージを創作したと指摘した。この研究は主に，トムヤンティがこのイデオロギーを読者に伝える方法に焦点を当て，小堀にタイらしさを加えたことによって，タイ読者が好評を寄せることにつながると結論付けた。[17] 一方，Netisingha（2011）は，『メナムの残照』における日本人像を分析し，作中の日本人像の二面性を明確にしている。[18] ところが，Sirasart（2010）もNetisingha（2011）も，『メナムの残照』における日本人男性像の肯定的イメージを示しているが，西洋の影響には言及していない。平松（2013）は原作のみならず，1995年の映画版も研究対象とし，小堀，アン，映画版のみに加えられた婚約者の関係は，『蝶々夫人』と同様だと指摘している。[19] しかし，『メナムの残照』におけるジャポニズムに関して，それ以上言及されていない。

本論文は，以上の従来の研究を踏まえて，ほとんど言及されていないジャポニズム要素と，「先進国男性—オリエント女性」を考察する。

4．『メナムの残照』の誕生

トムヤンティは専業としての女性小説家の道を切り開いたと言える。100作品以上にのぼる著書があり，そのうちいくつかの作品が映画化あるいはドラマ化されている。また，2003年の世論調査の結果，タイ人読者に最も好まれた小説家だとされている。[20]

トムヤンティは1937年に軍人の家に生まれた。14歳の時から短編小説を雑誌に投稿したが，世間に作家として名前が知られ始めたのは，『Naifan（夢の中）』を書いていた19歳の頃である。大学３年次に中途退学し，小説家を専業とした。恋愛小説が多いが，政治学に興味，関心を持ち，王党派，民主主義の思想が反映されている作品も少なくない。参議院議員も務め，タイ王国国家芸術家賞（文学）を受賞している。

『メナムの残照』はトムヤンティの代表作の一つである。この作品は上述したようにタイの日本趣味小説の代表作品で，戦後の世代に日本・日本人イメージ形成に非常に影響を与えた作品であると言える。しかし，インタビューによると，そのような作品を制作したトムヤンティは日本語もできず，来日した経験もない。[21] トムヤンティは日本語ができる友人，ガイドブックや

当時の日本に関する書籍を頼りに『メナムの残照』を執筆したのである。

6歳のトムヤンティが戦時に避難した際，日本軍と接触する機会があった。[22] トムヤンティはそのときの経験をもとに，日本軍に対する良い印象を抱いた。それは「人間らしい」と示すことができる。タイに侵入して残虐だと思われる日本軍である半面，同じ人間であり，待っている家族，愛する娘を持つ。その後も，幾度か日本人兵士に遊んでもらうなどの接触があった。一方，トムヤンティは枢軸側の捕虜であった友達にそのときの経験も聞いたが，それによってトムヤンティの日本人のイメージが左右されたことはなかった。

『メナムの残照』を執筆するきっかけは，1965年のカンチャナブリー県旅行だった。[23] そのとき，トムヤンティは連合軍共同墓地に行き，お墓参りの花束に付いていた弔文のカードを見つけた。1995年映画版の『メナムの残照』に関するインタビューによると，これはオランダ人の母親から軍人であった息子に贈ったものであることがわかった。[24] このカードはトムヤンティに戦時に遠い国から来た男性を連想させた。その上，残された家族がどれだけ戦争を憎むのか，戦争はどれだけの人を悲しませたのか，ということも想起させたのである。以上のことを踏まえると，トムヤンティが『メナムの残照』を通して，読者に，「戦争中の敵国の軍人であれ，どの国の人でも同じ人間であり，その人を愛し待っている人が存在する」ということを伝えたい意志が明確になる。

5．『メナムの残照』におけるジャポニズム要素

5.1 「オリエント女性」を改良した「先進国男性」

『メナムの残照』の舞台は戦時中のバンコクに設定されている。主人公アンは大学生だった。父親は海軍士官で母親は果樹園を持っているが，アンが幼いころに離婚した。アンは日本語に興味を持ち，日本人の歯医者のヨシに教わった。幼馴染のワナスはイギリスに留学する前に，アンに求婚したが，アンは彼を待つと約束する。第二次世界大戦が起こり，生活が大変になったので，アンは退学を決意した。戦争のためワナスが帰国できなくなることも含め，アンは戦争や日本人に対して嫌悪感を持つ。また，そもそもアンは愛国心が強いため日本軍に対する抵抗感もさらに強くなった。

ある日，アンの家の隣が日本軍の造船所となった。アンはこっそり様子を見に行った。そこで，アンは小堀と出会う。その後，小堀のタイ語家庭教師として勤めていたアンの知り合いが造船所の石油を盗み，小堀に処罰された。アンはそれに対して反対的意見を主張した。その後，酔っ払ってアンの果樹園で暴れた小堀の部下が同様に処罰され，小堀の正義感が明らかとなった。それがきっかけとなり，小堀とアン，そして，アンの家族との関係が始まる。やがて，アンに対する小堀の想いが愛へと変わっていた。一方，小堀に対するアンの想いは信頼感から始まり，愛情へと変化していくが，アン自身は自分の気持ちを認めようとしない。

空襲のため小堀がアンを守ろうとしたが，二人の関係は噂となり，そのことは当時のタイ女性としては恥であった。恥をかかぬように，小堀はアンと結婚することになった。小堀は敵であり，ワナスとの約束も守らなければならないため，アンは小堀に対する自分の想いを否定した。だが，初夜の小堀による強引な性行為はあったものの，二人はそれなりに幸せな結婚生活を送っており，アンは妊娠した。その間，幼馴染のワナスが日本軍に抵抗したタイ人による「自由タイ運動」に参加し，タイに潜入し逮捕された。小堀がワナスの通訳になったためにワナスが困難な状態になったことをアンは誤解し，それが原因で流産をしようとした。結果的には無事であったが，小堀とアンの夫婦関係は崩壊していく。小堀は家に帰らず，ミャンマーに移動する申請もする一方，アンはその件で苦しんだ。物語の最後でアンはようやくワナスに会い，ワナスを待つ約束が取り消され，小堀に対する誤解もすべて解けた。しかし，それを偶然に見て誤解した小堀は傷心のままバンコクノイ駅に行って爆撃のため重傷を負った。アンは小堀を見つけて，自分の気持ちを正直に告白することができたが，結果的に小堀は死んだのである。

『メナムの残照』は恋愛小説でありながら，「国籍を問わず，同じ人間である」という思想を小堀とアンの関係を通して，読者に語り掛けた。アンは物語の前半で，日本人代表の小堀を「そいつ」と呼び，「野蛮人」「残虐な奴」と言う。一方，アンの母親オーンは，アンが小堀も含めた日本人に対する暴言を口にするたびに，「国籍を問わず，同じ人間である」といった考えを教える。例えば，日本軍のタイ進駐後，親しい関係だった日本人歯科医のヨシがアンの家に訪れた。そのとき，アンは反抗的な行動を取ったのだ。それに対して，オーンは以下のように言っている。

> 「あの先生は善い人だよ，悪いところがあれば直せばよいのです。日本人に向かってあんな失礼な態度をしてはいけません」[25]

アンはオーンのこうした発言及び小堀との接触，小堀の発言により，意識と態度がだんだん変容していく。

第75話には，明らかな変化が見られた。以前は小堀や日本人を気軽に「そいつ」と呼んできたが，第75話では，それに迷うアンの姿勢が表れている。

『メナムの残照』の展開で，「国籍で人を区別する」態度から，「国籍を問わず同じ人間である」ことへのアンの意識変容の過程が明らかである。作中では，アンの愛国心の強い言動や行動は悪とされ，母親のオーン，コボリ，ヨシ先生などに批判されている。とりわけ，オーンとヨシ先生に対するアンとの「母親—娘」，「先生—学生」という関係に着目したい。当時のタイ社会では，両親と「第三の親」に値する先生に従うべきという価値観が存在していた。こうした関係に基づいて，当初のアンの思想は「野蛮な日本人」「残虐な日本」「国籍で人を区別する」否定的なものであった。「先進国男性」の小堀は，「オリエント女性」のアンを変える役割を果たす。これは『メナムの残照』におけるジャポニズム要素の一つと言える。

5.2　ジャポニズムの主柱：日本，ムスメ，サムライ

以下は『メナムの残照』での風光明媚な日本に関する記述である。

> 「日本はとても美しい国だそうね」
> 「日本は——」
> 小堀は手ぶりで表現しようとしていたが，相手がわからないようなので前に座っている人を見ながら，英語に切り替えた。
> 「島国だと言ってるの」
> アンスマリンは気がすすまないまま訳した。
> 「そう，島国，そのネーチャーが美しいです」
> 「自然が美しいのだって」[26]

この会話は，小堀が初めてアンの家で食事したときのものである。「島国」はこの会話以外にも現れる。日本に関する描写は少ないながら，桜も含め，日本の自然の美しさが強調され，元来ジャポニズムと同様に風光明媚な日本が描かれている。

家父長制社会は日タイの共通点の一つであるため，女性の従順なイメージや男性に満足する存在は，元来ジャポニズムの要素であるかどうか判断しがたいのだが，以下のような発話がある。

> 「日本では活け花，家事，炊事などは女性の男性に対するサービスと考えられているのです」[27]

当時のタイの価値観では，家事，炊事は女性がするもので，現代にも続いている。それに活け花という日本らしさが加えられている。この会話の前に，小堀は「日本では，女性は全部，活け花を習うのです」と発話しており，これも含めて考えると，日本女性が花に結び付くイメージが描かれている。これは元来ジャポニズムの「ひ弱な花」と同様だと考えられる。

この他に，アンの婚約式における姿も，トムヤンティの目に映る日本女性のイメージを表している。

> 「彼女（アン）は礼儀正しく，丁重に務め，一同の賞讃の的となった。とくに使節の一行とともに，日本式に（日本人女性のように：スィラダー注）正座して手を膝の上に置き，少し下向きになっていたとき，写真班の人たちが叫んだ。」[28]

この記述は，その場にいる日本人からすると「賞讃の的」の存在が描かれている。これは，アンが日本人女性に「仮装」したシーンと言える。この場面での「礼儀正しい」「正座して手を膝の上に置き，少し下向きになる」という描写は，日本人女性の従順で大人しい姿を描き出している。アジア女性のトムヤンティの視線に映る日本女性ではあるが，元来ジャポニズムと共通するイメージである。

以上の描写で，「礼儀正しい」という点に焦点を当てたい。「礼儀正しい」や「丁寧」は，小堀だけでなく，作中の他の日本人もこの言葉で表現されている。他方，日本軍に関して，「あのサムライどもは非常に残虐だよ」[29] という記述もある。この発話の「サムライ」と「残虐」に注目したい。これを発したのは町の人たちである。日本軍を「サムライ」と呼ぶのは，「サムライ」が日本男性の代表的なイメージであることを強めている。一方，「サムライ（日本軍）」は残虐とされた。日本軍は侵略者と認識されたため，「野蛮人」「残虐」というイメージで描かれているのかもしれない。これに対して，小堀は「僕は自分が立派なサムライでない」と評価した。小堀は，他の日本軍と別の存在だとされていることは明らかである。アンも以下のように発話した。

> 「わたしは，あなただけは敵の中でもただ一人の紳士だと思っていたわ。でも——それは間違いだったわ。あなたもやはり残酷な利己主義者にすぎないのね。」[30]

これらの記述と，物語の前半に見るアンの態度を照合すれば，日本が「野蛮人」という存在は顕著に見られる。戦争という要因から影響を受けているのだが，これも元来ジャポニズムとの共通点である。アンは「オ

リエント女性」で，差別される客体だが，アンは逆に「先進国男性」を見下ろしている。

ところが，野蛮人にハラキリなど気高さを加えた「高貴な野蛮人」の姿が，アジア女性の作者に移植するとどのようになるのか。これについて，作中に登場したオペラ『蝶々夫人』の名言‘It is better to die than live in shame.’に類似する記述に着目したい。このフレーズが初めて登場するのは，アンが捕虜のミスター・マイケル（以下，マイケルとする）を助ける場面である。アンは，マイケルをクローゼットに隠していた。小堀はそれを知っていたが，以下のように述べた。

> 「日本では威厳をなくしたものは生命を失ったも同様だと言われています。死者を殺すのは無意味なことでしょう」(31)

日本語訳では，威厳という単語が使われているが，原作では，「Saksii」（プライド，誇り）という単語で表現されている。また，別の場面で小堀はアンに対して，「これは名誉に関する問題です。日本では『名誉を失うより死すべし』と言われています。」と繰り返した。これらのフレーズは，日本人の信念として登場すれば，元来ジャポニズムのように，日本にエキゾティシズムを加えるだけであると思われる。しかし，第51話で，アンは自らマイケルに，「人間は名誉を失ってはおしまいです。」と話す。オリエント女性のアンは明らかに先進国男性の小堀から無意識に影響を受けたものである。仏教もキリスト教と同様に自決は禁断とされているため，タイ社会もハラキリはエキゾティシズムのはずだった。しかし，アンのこうした発言から，この名言が抱える武士道精神は，元来ジャポニズムと異なる価値を付けられた。元来ジャポニズムが表象する日本と同じ要素ではあるが，作者トムヤンティの視線に移り，タイの価値観により評価されると，肯定的な印象になっている。小堀は，元来ジャポニズムにおける日本男性表象と共通する点がいくつかある。それに，「礼儀正しい」「丁寧」「明るい」「暖かい」「頼りがいがある」なども加えられた。これは，アジア女性の作者トムヤンティの視線に映る日本男性のイメージとも言えるかもしれないが，小堀の肯定的な資質は，日本の固有的なものより，普遍性が高い。これらの資質は，「サムライ」に装飾された。これは，高貴な野蛮人というエキゾチックな存在のサムライを，軍人らしく男らしい「守る役目を果たす」サムライの存在に変換させた。

5.3　鏡としての日本と西洋

小堀は他の日本人とは別の存在だが，作中では日本男性の代表としての役割を果たしている。それに対し，アンはタイ人女性代表であった。作中には他のタイ人の登場人物も存在するが，鏡としての他者という論に基づいて，アンを小堀との二項対立としての存在とした。また，マイケルも西洋人の代表として見なす。この節では，「先進国男性―オリエント女性」の構図で，鏡としての他者に接触することによってどんな自己像が描かれているのか検討する。

アンは，従来の研究でも指摘されているように日本的オリエンタリズムで描かれるオリエント女性像とは異なっている。「白い肌」のような外見はもちろんのこと，アンは英語も日本語もできるインテリである。とりわけ，日本語ができる点は，アンを特別な存在にさせる。偏見の視線を浴びるはずのオリエント女性でありつつ，アンは文化人であることを示している。また，元来ジャポニズムでは，日本女性をひ弱な花で儚いイメージを描くのだが，アンはそれと異なる。アンは「先進国男性」の小堀に何度も助けられる「オリエント女性」である。その反面，アンの性格について，マイケルは，アンの家は「敵中に女性ばかり」だが，日本軍に尊重されることから，「あなたは男のように意志の強い勇敢な人です」と評価する。弱々しい女性に男らしさを加えることにより，アンの強さが強調された。また，捕虜のマイケルはアンに頼ることに注目したい。「オリエント女性」のアンは「先進国男性」のマイケルに信頼されることで，受け身のオリエント女性を脱した。これは鏡の他者を使って構築するイメージの一つであると考えられる。

他方，小堀とアンの会話には以下のものがある。

> 「タイの料理はとても辛いですね」
> 小堀の声はいかにも実直そうである。アンスマリンは上品な微笑みを見せた。
> 「だからタイの人は熱血漢で，物事を思いつめる性格があるの」
> 「日本人はあまり辛いものは食べません。そして性格も淡泊です」(32)

原作には，熱血漢，物事を思いつめる性格以外に，「Detdiew（毅然）」という言葉も使われている。これらも，鏡としての他者を使って構築された自己像の一つだと考えられる。その中でも熱血漢に焦点を当てたい。これは「感情」で，オリエンタリズムにおける西洋男性の「合理的」な対象である。アンの感情的な性格について，マイケルは以下のように述べた。

「あなたは男のように意志の強い勇敢な人です。したがってときには間違った方向に進んでも自分の生命を簡単に投げ出すかもしれません。男性なら粗暴というか，あるいは純真とも言うのでしょう。このような軍人は敢闘勲章に輝いています。しかし，あなたは女性です。感情に走らず，もっと頭を使い理論を究めるべきです。人生を誤らないよう注意してください。あなたには輝かしい将来があります。もし，軽率に突っ走ったりすると，いつかはあなたが望んでいるものが失われてしまうでしょう。」(33)

この記述では，オリエントは女性の象徴，西洋男性とは反対に「非合理的」「感情的」，という要素が窺える。他方，マイケルは，アンの本質を見通せる。マイケルに見られる知性的，合理的，論理的，さらに真の価値を見分ける能力は，元来ジャポニズムにおける西洋男性の表象に類似する。

一方，この記述では女性のアンの持つ男らしさが強調され，強いイメージが描かれている。これに対して，小堀には同じ技法で女らしさが加えられている。小堀は「炊事，活け花，音楽について，女性と同じように立派な才能を持っているが，反面，立派な軍人」とされている。男性性の持つアンの有力，女性性を持つ小堀のやさしさはキャラクターをより現実的にするためかもしれない。しかし，アンをタイの代表と見なせば，タイの，弱い立場における強さが描かれていると考えられる。一方，小堀のこの資質は，家父長制社会の男性像を脱し，読者の同情を寄せて，作品の主題「国籍を問わず同じ人間である」に納得させようとしていると考えられる。

5.4 「先進国男性—オリエント女性」の領域

アンの家は，近代化されたバンコクではなく，トンブリー地区にあるタイ式家屋に設定されている。Prasarnnam（2016）で，この設定とアンの家族が農民であるのは，昔のタイらしさのノスタルジアに関わるとされている。これは，エキゾティシズムでありエロティシズムに結び付けると同研究で指摘された。

そのような Prasarnnam（2016）の指摘を踏まえ，アンと小堀の領域に視点を置いて検討すると，オリエントの古代性がさらに明らかになる。小堀の領域は造船所で，「機械」など現代のものが存在する。一方，アンの家はまだ石油ランプを使っている。「僕は生涯にわたり，年中鮮やかな花が咲くこの家とあなたのことは忘れません」という小堀の発話から，アンの存在が古いタイ式の家から離れないことは明らかである。

また，アンの奇異性は，「不思議にきれいな瞳」「不思議にいい香り」など小堀の視点によるアンの描写からも窺える。この奇異性はアンを，小堀にとっての理解不能な存在にさせた。この要素は，ロティの『お菊さん』における「私」とお菊さんの関係でも見られる。

従来の研究では，外国の影響が強い時代に執筆された『メナムの残照』はアンの古代性を使って，ノスタルジアのタイらしさを構築したとされた。そこで注目したいのは「先進国男性—オリエント女性」の領域である。『蝶々夫人』では，ピンカートンは日本を訪問し，オリエント女性の蝶々さんの領域に入った。しかし，その後，先進国男性の領域（家）を作って，蝶々さんを日本から隔離させた。オリエント女性の蝶々さんは先進国男性のピンカートンより下の立場にいる。これに対して，小堀はアンの家を訪れるとき，タイの習慣に合わせる身であった。一度アンの家で日本料理を作ろうとしたが，空襲のために中止になった。一方，アンが造船所に入る場面が極めて少ない。結婚後アンの家に住む小堀は『蝶々夫人』と異なり「オリエント女性」に同化される「先進国男性」になった。

6．「先進国男性—オリエント女性」で構築された「タイ」

『メナムの残照』におけるジャポニズム要素に着目すると，小堀の「先進国男性」としての存在は明白である。アンも小堀が「勝利者」と口に出して，日本男性の小堀の権力を強める。また，アンと小堀の結婚は，村人に「幸福」だと思われた。敵として見なし，物語の前半で偏見も見られるが，日本はタイより上の立場にあることを抵抗しつつ認めてはいる。これはトムヤンティの日本に対する意識と考えられる。

Prasarnnam（2016）で指摘されたように『メナムの残照』が執筆された時期に，東西冷戦期のタイ社会で外国の影響が強くなり，タイのアイデンティティが不安定な時代であった。本節ではトムヤンティは「先進国男性—オリエント女性」の構図を使って，どのようなタイを構築するのか，トムヤンティの国家に対する意識を検討したい。

アンは愛国心が強い女性と設定され，物語の前半では個人より国家に目を向けた。作中にアンのタイ人としてのプライドが表れる小堀とアンの会話がある。

「タイは花に例えばマリ（ジャスミン）か蓮よ，他国の花に例えたくないわ」
「その通りです。」
（中略）

「もし，タイで桜が咲いているなら持って帰ってください。恩に着ます。」(34)

また，結婚する前に，敵の国籍を持つ人との結婚に対してアンは以下のように抵抗した。

「あなたの民族は太陽から来た高等民族なのだから，他人種の領土まで荒しに来ないで，自国内にとどまるべきよ。私はタイ人のもっと下等な人との結婚に甘んじます。」(35)

上記からアンは日本が「太陽から来た高等民族」と認めている反面，日本を利用して「平等的な立場にあるタイ」を描き出している。

次に，小堀の希薄化されていく日本人らしさに焦点を当てる。『蝶々夫人』で見られるように「先進国男性―オリエント女性」という構図では，オリエント女性が先進国男性に合わせることが多い。しかし，小堀とアンの場合，先進国男性がオリエント女性に適応させることになった。タイ語を勉強しようとする小堀の姿勢や，結婚後アンの家に住むことから，小堀の希薄されていく日本人らしさが窺える。タイ式家屋にある和室は，小堀とアンの立場の象徴に値するものかもしれない。結婚後，アンの部屋は日本式に改造された。一見，アンは日本化されたと思われがちであるが，アンはそれまでの生活を変えていない。むしろ，小堀がタイ風の生活に順応したと言える。また，アンの母親オーンのような第三者からすると，小堀とアンの関係において，アンのほうが権力を持つ立場に立つ。しかし，小堀がアンにとっての「心の支え」とアン自身は考える。「国籍を問わず，同じ人間」などの芯となる思想は，アンが小堀により改良された。ここに日本の国際的な地位の高さが反映されているかもしれない。だが，総合的に見ると，日本は上の立場にいるのではなく，二人の関係が平等な立場ということは明らかである。また，小堀とアンがよく話し合う場所は，アンの家でも造船所でもなく，真ん中にある果樹園や船着場という点に注目したい。どちらの領域ではなく，二人が平等に話せる場所にされた。これも，『メナムの残照』における「先進国男性―オリエント女性」の関係の象徴に値する。

「国籍を問わず，同じ人間である」という作者の思想を踏まえ，アンのタイ人としてのプライド，小堀の希薄化された日本人らしさはすべて「タイは日本に負けない国」というトムヤンティの国家に対する意識を描き出している。従来の研究で作中の日本の良いイメージが明らかにされた。それらの日本表象は，良いイメージを持つ「先進国男性」と肩を並べる「オリエント女性」を作り出している。『メナムの残照』では先進国の日本が鏡として使われ，「日本にも負けないタイ」のイメージが暗示的に構築されていると言えよう。

7．終わりに

第二次世界大戦後のタイは，以前と異なり，外国からの影響が増した。焦点を当てたいのは，それらの外国は先進国という点である。外国は鏡となり，今まで気づいていなかったことを気づかせる役割を果たすのだが，外国の良さに目を向けて，自国に対する偏見が生まれる恐れがあった。従来の研究でも指摘されているように，1960年代に執筆されたタイの小説では，「国家」を題材にする作品が少なくない。『メナムの残照』の人気は，その影響を受けたと推測されていた。

『メナムの残照』におけるジャポニズムの要素に着目すると，「先進国男性」の小堀を使って，「オリエント女性」のアンの価値を強めている。また，弱いはずだった女性の存在に男らしさを加えるというアンを描く技法により，有力な立場が作り出された。日本は先進国で，「太陽から来た高等民族」というイメージが描かれる。それに対して，タイの代表であるアンは，タイ人としてのプライドを持ち，日本の代表の小堀とは，対等な立場に立っている。国際的な地位で考えると，タイは日本より下の立場にあるかもしれないが，タイは実質的には日本に負けないというタイ国に対するトムヤンティの意識が暗に二人の関係に描かれている。

本作品は恋愛小説であり二人の恋に注目されているが，双方の関係からこうしたイメージも暗示的に描かれている。日本の良いイメージを読者に語り掛けていると同時に，「タイはそれに負けない」という意識も構築されている。周辺作品におけるこのようなイメージの検討は今後の課題にしたい。

【注】

（1）トムヤンティの正確な発音は「タマヤンティ」であるが，本稿は従来の文献に従い，日本で知られている「トムヤンティ」にした。

（2）小堀が日本男性の代名詞になった現象について，高橋勝幸「タイにおける第二次大戦の記憶―自由タイ，『メナムの残照』，『王朝四代記』を中心に」『地球宇宙平和研究所所報』第二巻，2007年，126-142頁で示されている。筆者も同様の体験をした。

（3）平松秀樹「東南アジアにおけるタイ文学」『越境する言の葉—世界と出会う日本文学』日本比較文学会編，彩流社，2011年，51-59頁を参照。

（4）Evitra Sirasart, *KHU-KARMA and perception of the Thai consumers on Japanese and Japaness*, Bangkok, Chulalongkorn University, Master's thesis, 2010, pp.82-84.

（5）ジャポニスム学会『ジャポニスム入門』思文閣出版，2000年，29頁を参照。

（6）馬渕明子『舞台の上のジャポニスム—演じられた幻想の〈日本女性〉』NHK 出版，2017年を参照。

（7）エドワード・W サイード『オリエンタリズム（上）』平凡社，1993年，118-119頁を参照。

（8）オリエンタリズムにおけるステレオタイプについて，John Mcleod,Beginning *Postcolonialism*, Manchester,Manchester University,2010.が詳しい。

（9）ジャポニズム演劇における日本女性の表象について，上記の馬渕（2017年）が詳しい。

（10）ジャポニズムにおける日本人のイメージについて，上記の馬渕（2017）と以下の文献を参考している。

岩田和男「むかし，ムスメ小説があった—『蝶々夫人』と日本女性のイメージ」『異文化への視線—新しい比較文学のために』佐々木英昭編，名古屋大学出版会，1996年，41-58頁。

羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』彩流社，2005年，35-62頁。

小川さくえ『オリエンタリズムとジェンダー—「蝶々夫人」の系譜』法政大学，2007。

（11）上記の岩田（1996），53頁を参照。

（12）上記の小川さくえ（2007），55-85頁を参照。

（13）Teejuta Makhin, *Polotical Concept of royal nationalism in Tamayanti's novels*, Chiangmai, Chiangmai University, Master's thesis, 2015.

（14）平松秀樹「トムヤンティ『クーカム』（メナムの残照）再考—ロマンスの背景にみるタイのジェンダー観，国家観」『CIRAS discussion paper No.91：伝承と国民の物語—混成アジア映画研究2019＝Folkflore and Imagines Narratives—CineAdobo 2019（2020）』第91号，2020年，56-66頁を参照。

（15）Natthanai Prasarnnam, "Beloved Enemy: Values of War and War of Values in Damayanthi's KhuKarma,"in Pakorn Limpanusorn, *Thokthiang Rueang Khunkha*, Bangkok, Wipasaa, 2016, pp, 447-509.

（16）タナポーン・トリラッサクルチャイ『日本近現代文学におけるタイ表象の研究』，九州大学博士論文，2013年，82-88頁。

（17）上記の Sirasart を参照。

（18）Nanthinee Netisingha「タイ小説『クーカム』に見る日本人像」チェンマイ大学卒業論文, 2011年。

（19）平松秀樹「日本におけるタイ表象／タイにおける日本表象：異文化受容の前提となる相互認識を目指して」，『比較日本文化研究』第16号，2013年，130-146頁を参照。

（20）「作家に対する国民の意見」をテーマに，ドゥシットポールは2003年５月２～４日，バンコク都内郊外に住んでいるタイ人1,057人を対象に調査を行った。

（21）Pusadee Nawawijit et al, *Sayyai Sarnjai Thai-Yiipun Chiiwit lae phol-ngarn bukkhon phoo pen sai samphan song prathet*, Bangkok，元日本文部科学省奨学生会，2015，pp.130-137を参照。

（22）トムヤンティの経験に関して Witsawanart, *Kollawithee karnkhien niyay style Thommayanti*, Bangkok, Na baan wannakam，1995を参照。

（23）これについて，Ratchanok Namthorn は Damayanthi, *KHU-KARMA*, Na baan wannakam, 1993の前書きで述べた。

（24）*Sampart Thommayanti Khu Kam*（2538）（https://www.youtube.com/watch?v=Iw_spokDWCc），2019年５月14日閲覧。

（25）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』東京，アジア文庫，1997年，78頁。

（26）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』，149-150頁。

（27）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』，147頁。

（28）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』，435-436頁。

（29）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』，420頁。

（30）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』，620頁。

（31）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』，281頁。

（32）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』，149頁。

（33）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』，295頁。

（34）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』，150頁。

（35）西野順治郎訳，トムヤンティ著，『メナムの残照』，366頁。